

### 佐伯教育の揺籃時代

(その四) 高等小学校の沿革

山内武麒

(賛助会員・佐伯市山手区)

#### ○高等小学校の設置

明治十九年四月九日公布の勅令第十四号小学校令によ  
り、翌二十年には高等小学校を設置し副校することにな  
つた。即ち、旧南海中学の校舍を譲り受けて修繕を施し、  
郡立南海郡高等小学校として、二十年七月二日に開校  
式を挙行した。時の郡長斎藤利明氏が管理者となり、校  
長心得として郡書記関根三氏が兼務した。教職員は本多  
左右太と主簿訓導として、荒巻文吾、久代孝次郎の両氏  
の外に、教理科教員山崎千代、薬師寺ユキの両女史を合  
わせて僅かに五名であつた。

郡に於ける唯一の高等小学校であつたから、各村より  
の入学生を迎えねばならない。それで寄宿舎も設備され  
たのである。開校当初の入学生徒数は男女合せて百名で  
あつた。三学年は男十一名、女二名、二学年は男三十六  
名、女一名、一学年は男三十八名、女十二名であつた。  
明治二十年頃の於けるこの地方の学区は、高等小  
校が一郡一校、尋常小学校は戸長管理区域または連  
合による二十五と定められた。その結果、四年制高等  
小学校一校、四年制尋常小学校二校、三年制簡易学校  
五十三校となつた。

当時の高等小学校は、中學校に代わる一郡一校のも

のであつただけに、極めて權威あるものであつた。  
南海中學校は明治十四年五月に設立されたが、尋常  
小学校と併せてその進路に於ては初等中學校で、餘業  
年限は三年であつた。生徒数は僅かであつた。明治十九年  
の中學校令の改正によつて廢止された。この中學校が  
廢止されたのは補助關係で県立中學校は一校として  
なつてゐる。これより後中學校に學風うつするもの  
一變を與うて進路するの外はなく、その不便不自由は  
通りでなかつた。

#### ○南海郡高等小学校の沿革

高等小学校の設立が決まると、二十年の六月一日に旧  
藩主毛利高親公より、当校英學課の爲に毎月金三十五圓  
づつ、向こう五年間寄附される事になつた。旧藩公が常  
に同領地の教育に對し援助されたことは特に銘記すべき  
である。授業料も公の援助によつて僅か一ヶ月十二錢で  
あつた。

二十一年一月、斎藤郡長が北海郡部に報じ、政務局長  
菊井徳氏が本郡長に任じられた。二月一日、副校長心得  
が辭職したので、山中盛太郎氏が校長に任せられた。高  
等小学校初代の校長である。四月、文部省より奨励金が  
下附されたが、その主なものは物理機械で動植物の標本  
も加えられていた。七月、山中校長に代つて白井の久竹  
腰籠太郎が就任した。

二十二年三月、第一回の卒業生を出した。男八名、女  
二名であつた。今年四月、郡長の愛護があつて関根三  
氏が本郡々長になつた。  
二十三年七月、竹腰校長日田郡に報じ、石田豊城氏が  
後任の校長に任せられた。今年十一月三日、天皇皇后二

陛下の御真影を拜戴することになり、金町挙げて奉迎した。

二十四年一月には更に教育に關する勅語藤本が下賜されることとなり、光榮に輝く、感深く祝賀の意味で企てられた行事に、軽気球の飛揚計画があつたという。全年十二月、閩郡長は県参事官に榮転し、後任として玉置本資氏が本郡々長となつた。

二十三年十月の改正小学校令によつて、南海郡高亭小学校が公立を廢して、二十三ヶ町村の組合立にするこゝになつたが、その実施は準備期間を考慮し、二十四年三月の勅令第十九号によつて、従来のまま存続し、二十五年十月から改正令によつて実施することになつた。

二十五年十月二十七日、蒲江村へ修学旅行を試みたが、これは開校以來始めて行なつた宿泊旅行であつた。

二十六年一月の新年式から県訓令による小学校祝日大祭日儀式順序に従つて挙式することになつた。小学校で歌う祝祭日の歌詞並に樂譜がきまつた。

本郡にオルガンが入つて來たのは明治二十八年頃であるらしい。それまでは手風琴時代が長く、南海郡高亭小学校の開校當時は琴で伴奏していたという。式日唱歌が制定される前は、春の弥生と式日に唱わせたことがあつたとの事である。尋常小学校で唱歌が始まつたのは、つと後のことである。唱歌が教科に正科として入れられた頃は、春の弥生、霞か雲か、若紫、白蓮、白菊などで、奈良の都に至つては最高のものであつた。

二十六年四月、校舎の増築に着手し、寄宿舎をこゝちその後建設した。この校舎内に御真影奉安所の設備が始めて出來た。当時の生徒数は既に三百に近く、男子百九十四名、女子六十三名で、寄宿生も三十一名の多數に

及んでいた。南海中学以來八年間英語科兼任の久代孝次郎氏は、英語科が隨意科になるに及んで九月限りで辭職することになり、英語科は廢することになつた。

南海中学校が廢校となつて後、向学心に燃える御上へ青少年とそのまま放置するにしのむずと、田藩主毛利萬藏公は明治二十六年私立鶴谷学館を新屋敷に設立した。その教科目は修身、英語、数学、歴史、外三科で、修業年限を二年と定めた。教師は岡本田哲夫へ独歩、中島藤一郎氏などであつた。独歩はその時二十ニ才、若い教師で、英語と数学を教えていたそうだ。独歩は二十六年十月に赴任し、翌年の夏、半ばに佐伯から去り、その後は藤田賢哉氏がかゝられた。二十八年にこの学館は私立学校として正式認可を受け、僅か二年足らずで閉校されたことは残念であつた。この後小学校卒業生の進路は久しく開かされては、明治四十四年に方つて待望久しかつた佐伯中学校の誕生を見ることがある。

二十七年三月九日、天皇皇后兩陛下への銀婚の拜賀式を挙行し、盛んな祝賀を催し兩陛下の萬歳を奉祝した。

二十八年四月、校舎一棟の増築に着手し、運動場の中央に建築することになつて、運動に体操に大変不便と感ずることになつた。七月の水泳時期に白粉より伊東智輝氏を招いて山野内流の水練教授を受けた。

二十九年五月、玉置郡長東国東郡へ転任し、後關重臣氏本郡々長に任せられた。七月、前農商務次官前田正名氏が來校し、一流の主義による講演が行われ、撞数珠が氏から贈られた。

三十年一月十一日、皇太后陛下崩御の旨が郡長から達せられ五日間の休業をなし、二月八日の御大葬当日は尋常小学校に於ける遙拜式に全校参列した。

○佐伯高等小学校の沿革

三十年三月組合を解散し、十一月に南海郡高等小學校と廢校して、三十一年四月から佐伯高等小學校として更生した。即ち、佐伯町立となつて鶴岡、明治、木立、東中浦、西中浦、中野の依託を受けることになつたのである。当時の職員は、石田校長以下中村岩太、矢田喜久太、林鼎一、柴田米三郎、山名驥、吉垣純、山崎千代の諸氏であつた。

南海郡高等小學校の組合立を解き、新に佐伯、堅田、上畑(三十一年に小倉と改称する)、新開(三十二年に考陽と改称する)、直川の五高等小學校が獨立し、さうに浦代、蒲江の兩尋常小學校は高等科を併設することになつた。

三十一年七月九日から八月十五日まで、郡の共有財産である従来の校地校舎並に校具一切を売却し整理した。臨時休業をした。八月二十七日佐伯町では臨時所會を以て召集し、佐伯高等小學校の校舎を新築し校具を新調することと議決した。名目だけの佐伯高等小學校は産まねた。かゝる校舎がない。止むを得ず尋常小學校の暑中休暇を利用して、七月九日以來臨時中に遷れた教科の授業をした。そうして九月一日からは正午までを尋常科の授業にあて、午後零時半から四時十五分までを高等科の授業時間と定めて、新築成る日を待った。九月即ち第二学期から別科を置くことになつた。これは裁縫科と主とするもので、卒業した女子の爲の實科指導が目的であつた。三十二年一月、職員會議の結果本校全生徒を中隊に編成し、毎土曜日校長又は首席指導が指揮して教練と行うことになつた。また、通常号鐘、非常号鐘と定めて集合訓練と行うこととされた。三月、新学期を迎える準備の一

として、校内樹木その他草木類に科目名札を附し、運動場の北隅凡そ四十坪を使用して植物栽培園を作つた。三月二十五日、佐伯高等小學校として第一回の卒業式と挙行した。卒業生は男三十四名、女七名であつた。この年から男女一同卒業記念の字真を撮ることとなり、式後に茶話会をひらくことをきめた。三月末日を以て佐伯町立佐伯高等小學校を廢して、佐伯町鶴岡村組合立佐伯高等小學校となつた。

年内から建築に着手しその工事を急がせていた新校舎は、いよいよ五月二十一日新築落成し盛大な落成式を挙行した。校地は現在の佐伯小學校の校地の城山寄り約半分所であつた。七月十五日新築校舎に移転を終り、新しい意氣を以て水の香漂う新校舎に佐伯高等小學校としてスタートしたのである。十二月、石田校長は本郡視学に転じ、藩師寺徹校長と迎えた。

三十三年二月、鶴岡村の有志の人達から雨倉二十坪の寄附があつた。その数は僅かであるが心暖まる思いが十分である。三十三年は佐伯開市三百年に當るので、三百年祭が四月三日の氏神祭典と合せて行われ、所と挙げての大変な賑わいであつた。本校は祝典のため運動場を開放した。三十三年度、新学期に入つて、入学児童数が急に増し校舎は狭くなり、遂に一、二学年を二週向毎に午前午後交代させて半日授業をすることとした。

四月には、東宮殿下御慶事奉祝の祝賀式を挙行し、また職員一同福岡、熊本、佐賀地方の学事視察旅行をした。七月には水泳練習を聞き、臼杵から伊東安五郎氏を聘して指導を受けられた。十月、三四学年生徒六十名を引率して速見、宇佐、下毛、大分、大野の五郡にわたる修学旅行

をした。

三十四年四月の新学期に先ず制定されたのが男生徒に袴着用させることであつた。制服同様必ず袴を以かせて容姿を整えて登校させることにしたのである。

五月七日、皇孫殿下御降誕を祝し、三大節同様奉祝式を挙行した。五月二十一日は本校の創立記念日に當るので記念式を挙げ、式後運動會を開く例を始めた。六月二十日、増築校舎の入札を行い、金二千七百三十一圓九十銭で落札し直ちに建築準備にかつた。

九月、本校の前身南海部郡高等小学校時代から引継ぎ勤務されていた山崎千代氏が休職を命ぜられた。同氏が裁縫科教員として指導に當つたのは明治十七年からで、小學校令改正により高等小學校創始と共に高等小學校へ転じられたのである。

十一月に入つて、山名、石坂、小幡、吉垣の諸氏が引卒のもとに、ニ学年以上の男子百余名が津久見、臼杵地方へ修学旅行をした。十二月増築校舎が落成したので、新しい奉安所に御真影を奉遷し拜賀式を行つた。

三十五年一月の新拜賀式はこの増築された新校舎で挙行された。二月、當時の特命全權公使矢野文雄(龍溪)氏が来校し、郷土の学生のために講話を試みられた。同氏は佐伯出身の大先輩である。

三月三十一日、佐伯町鶴岡村組合立を解き、更に佐伯町鶴岡村水立村組合立に改められて、新学期からこの新組織で進むことになつたのである。

三十五年度から女子にも袴を着用させることを制定して制服同様とした。春去り夏を過ぎて第二学期に至るまで無為に終り、九月十二日、葉師寺校長が京都府へ出向を命ぜられて、後任の吉村重之校長を迎えたのは一週間後、十九日であつた。十月、教育資金任用規則による賞

を受けける。

三十六年二月二十六日小松宮殿下薨去、御葬祭遊拜式を行つた。

年度改まつて定例行事を進め、六月に入つて男女共に制定の服装容姿に不躰になつたのを認め励行するよう気合を入れる。なお女子には筒袖を奨励することになつた。

三十七年二月、ロシアとの国交を断絶して日露の開戦となるや、軍國の氣運溢れ二月二十三日から隔週日曜日毎に第一時に職員が交る交る戦役について戦況講演をすることになつた。年度末に迫り三月に入つて本県師範学校長河部判三郎が未救する。猶いて佐伯婦人会が本校で開催されて、大久保大分県知事が来臨された。また水産品評會も本校を会場として催されるなど、あつたをしく送つて新学期を迎えた。

三十七年度は殆ど無為に過ぎて、三月になつて名譽の負傷をして帰郷した海軍一等兵曹富沢氏と、陸軍上等兵佐藤弥三氏の實戦談を聞いた。

三十八年度も定例行事の外に何の企画もなく、五月の創立記念日、十月の修学旅行、十一月の佐伯婦人会開催と名士前田正名氏の来校などあり、十二月には蜜柑の季節を利用して臼杵津久見旅行を試みた。十二月中旬頃から凱旋帰郷軍人を迎えるため、葛津頭に全生徒を引率して出迎えたことが年度に反んだ。

年が改まつて三十九年の一月から全職員が手分けして歴史地圖の製作にとりかかつた。そのために毎日午後五時燈下まで職員の大半がこの仕事を續けて完成した。三月渡辺郡長が休職し、多羅間郡長となる。

三十九年度に入つて、先づ四月十七日に本校々庭で郡主催の凱旋祝賀會が催された。萬歳の声が城山にこだまし、凱旋兵士の頭上には榮光が輝いた。六月、司侍従武

官が来伯し、全校生徒が出迎えをした。九月、吉村校長が裁縫伝習所の所長を兼任した。裁縫伝習所が出来たのはこの頃であつたのであろう。

裁縫伝習所は当時南海郡教育会が佐伯高等小学校に併置したもので、修業年限二十年で教員養成がその目的であつた。高等小学校卒業の女子と收容したのである。これは明治四十五年に廢されて、佐伯而立佐伯実科女学校となつた。これは大正七年に所立から郡立に移管されて、本科三年、補習科一年となつたが、大正九年に中村へ現在の市役所の位置に移動して、郡立佐伯高等女学校となつた。大正十二年に県立に移管し終戦まで続いたが、昭和二十二年の新学制により鶴城(当時の佐伯第一)高等学校に吸収された。

十月には新任の千葉知事へ来校を迎えた。四十年以降四十二年三月の尋常小学校と併合するまでの記録は明らかでないが、四十年七月、吉村校長が朝鮮に出向して、その後を受けて石川龜治氏が校長となる。

四十一年には組合立を解消する議が起つて、尋常小学校と併合する機運が生まれたものと思われる。高等小学校の創設以来併合に至るまでの間、忠実に勤務した学僕川野常蔵さん、通称常さんのことを忘れることは出来ない。常さんは併合後も引きつづき忠勤した。

学校の小使さんのことであるが、尋常小学校の初代の小使が甚六という人であつたので、その後の小使もみんな「甚六さん」と呼ぶようになり、甚六は小使の別称になつてしまつた。数代後の小使がこれを嫌い、甚六と呼ぶと叱つていたので、それから姓を呼ぶようになつた。合併の頃は高等小学校創設以来勤続して、天常さんが引続いて小使であつた。律義で無口な人で、背は低くやせていたが、がっちりしていた。常さんの

名は印象深い。また常さんの作つた草履はその頃名物の一つであつた。この佐伯高等小学校で若い頃教鞭をとられた林鉄門先生、「追憶」と題する文から抜粋して当時を偲んでみよう。

当時の佐伯高等小学校は、私から見れば随分毛色の変わった所であつた。何でも正式の師範教育を受け左の校長(吉村校長)と私との二人であつたように思う。旧友山名君、吉垣君、和田君、石丸君、田中君、関谷君、いづれも型を破つた特長と経歴を持つ友人ばかりであつた。私は割合にこれらの先輩知友と住心地のいい教育者生活を送つたこと、今も懐懐と感じている。議論風荒意気の旺んなこと、今昔の感にたえないものがあつた。中には故人となられた人が多い。感慨無量。

若い教育者としての私の瘦せ我慢の思い出は天張り野球である。事の起りは学友の落成記念展覧会に、隣の臼杵町の高等小学校が修学旅行に来て、運動場を独占して野球をやると、我々教員を打ち下す。私一人はさくなくて見てゐるのみを見て、私の苦い血は燃えた。だが何一つ野球の用具とない。当時我が郡各県下で野球に熱をとなえていたのは、南郡上野村の小学校高等小学校であつた。これも主都佐伯の權威に關することである。勝たざるべからず。

私と私の愛持の川辺、勝田、古川、古田、八木、岡本、今泉らの諸君は、每晚宿直室に集つて野球道具の製作だ。ミットを作る、ベースを作る、マスをこしらへる。胸当てまでこしらへる。バットは口細工を

する所に頼む。それからいよいよ練習を始めると感觸子を割る。フ

来る、時々吉井校長からずいぶん小言を食ったものだ。熱心員とおそろしいものはない。御土佐伯の野球が東九州に覇をとるゑるそもその動機はここに芽ぐんだ。それから松舞台の阿南君も野村君がこれにへびをかけて大成したことは勿論である。

もう一つ面白かつたのは、その時分に郡主催の應賞出品展であつた。学校からは私が主となつて、教員園と児童博物室を出品した。両方とも例によつて私と児童との合作、無論外に先生方も材料を提供されたように記憶するが、今から考へても左程完全な研究と遂げたものではなかつたと思ふ。教員園も博物室も出品規程に融れるとかで体よく送からも水そうであつたが、とうとう横車を押して審査委員諸氏を引張つて来て当選の中に入れてもらった。よくも固々しく頑張つたものである。思い出しては微笑を禁じ得ないが、それと近に入らぬは何時でも強住するといふ腰があつた。高が若い訓導一人が郡に出たいといふと、郡長自身が引留め役に出るといふ時代であつた。

(おわり)

研究

耕地整理記念碑

—— 稲作農業の姿をたがねて ——

会員 山 本 保

農林省大分統計調査事務所は、この秋收穫を前に次のような稲作状況を發表しました。

「県下の水稲は史上最高の大豊作の見込み——作付面積が減つてゐるのに豊作をつたは、栽培技

術の向上で反当左りの收穫がふえ、また気象条件がよかつた。——」  
この水稲栽培に関連して、耕地整理碑について考察を試みたいと存じます。

一、佐伯市久部(旧上堅田村)の藤崎公園(堤公園)に日、明治四十四年一月二十日建立の耕地整理記念碑があります。(詳細省略)

二、佐伯市谷川部落(旧青山村)の谷川橋のたもとに、次のような記念碑が建てられています。

(表面文字)

井田 記念碑

(上部に、右より横書き)

方今、耕地、整理益々切要ナルモ、之ニ着手スル者皆肥沃坦平ノ地ニ止マレリ。

青山村ノ地質峻峭、宇谷川ノ如キハ傾斜瘠土ニシテ、灌溉至難ナレバ、古来零作ニ了セシコト多キモ、井田ノ拳ハ、新ジテ不可能トセリ。

而シテ染矢勘太郎君独リ以テ可能ト為シ、明治四十年独力之ヲ本字旁中ノ劣地一房ニ試ミ、自給自役以テ理想ノ成績ヲ拳ゲタリ。

爾来、灌水至便收穫亦極メテ多ク、宇民以テ奇蹟トナス。

大正元年、君進デ公許ヲ受ケ、子民ヲ督励シテ、全部整理ノエヲ起シ以テ其一歩ヲ成功シ、

同三年又起エシテ阡陌井然、竟ニ今日ノ大成ヲ就シ以テ四散歩余ノ新穰田ヲ得タリ。

嗚呼、君が経営ノ効ハ新ニ帝國ノ田積ヲ加ヘタル者外謂フベシ。蓋シ本字ノ如キ地形ノ井田ハ、之ヲ以テ高